◇2月の天文暦◇

日	時	記事
2	2	**朔**
4	10	立春（太陽黄経 315°）
9	18	**上弦**
14	20	月　最近
16	9	**望**
19	6	雨水（太陽黄経 330°）
20	22	海王星　留
23	15	**下弦**
24	12	水星　外合
26	19	月　最遠
26	19	土星　合

月の名のおこり

B. C. 8 世紀ごろ，ローマでは1年が 10 ヵ月，304 日からなるきみょうな暦が使われていた（表参照）．第1～4 月の名称は王の名のようだが，第5～10 月の名はあきらかに数から来ている．このような暦では季節と一致しないので，ヌマ王（B. C. 710 ごろ）の時代に Januarius（29 日）および Februarius（28 日）を加え，30 日の月をすべて 29 日にした1年が 12ヵ月，355 日からなる暦が採用された．1 年を 355 日にしたのは太陽暦の要素を入れて 12 朔望月（354.367 日）に合わせるためで，2 年に 1 度 22～23 日の閏月 Mercedonius を Februarius の 23 日と 24 日の間に入れて季節とあわせていたようである．その後 Martius にあった年初が次第に移って B. C. 153 には Januarius に来てしまった．

B. C. 46 ユリウス・エサルは改暦を行ない，Januarius を年初とし，奇数月を 31 日偶数月を 30 日（ただし，Februarius は 29 日）とした 1 年 365 日からなるいわゆるユリウス暦を作った．B. C. 44, Quintilius はカエサルを記念して Julius とあらためられ，4 年に 1 度 Februarius を 30 日として閏年をもうけることにしたが，はじめそれが徹底せず 3 年ごとに閏年をおいたりして混乱した．B. C. 8 アウグストゥスはそれを調整し，ついでに Sextilis を Augustus と改名したが，自分の月が 31 日でないのはけしからんと，Februarius から 1 日とって日割りを改悪した．こうした月の名や日割りはグレゴリオ暦になってもそのまま受けつがれ現在に至っているわけだが，なにかそこにすっきりとしないものが感ぜられる．（⊕）

ローマ暦

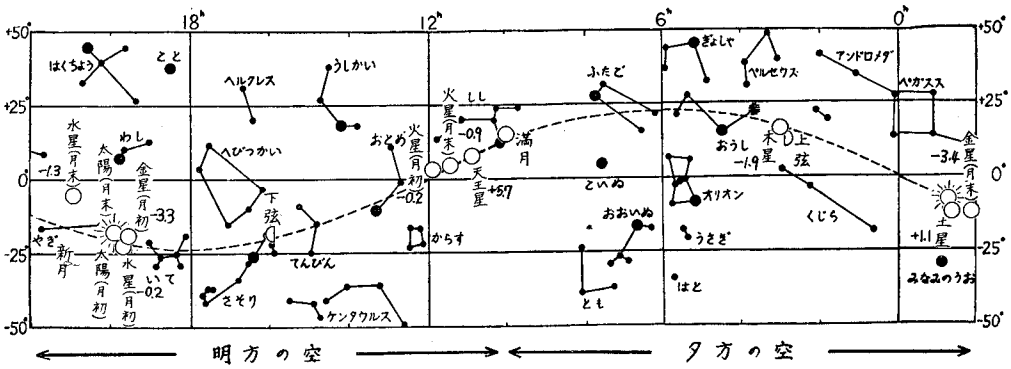
1.	Martius	31 日
2.	Aprilis	30
3.	Maius	31
4.	Junius	30
5.	Quintilis	31
6.	Sextilis	30
7.	September	30
8.	October	31
9.	November	30
10.	December	30

東京における日出入および南中（中央標準時）

II月	夜明		日出		方位	南中		高度	日入		日暮	
日	時	分	時	分		時	分		時	分	時	分
1	6	8	6	42	−20°.6	11	55	37°.2	17	8	17	42
10	6	1	6	34	−17.2	11	55	39.9	17	17	17	51
20	5	50	6	23	−13.0	11	55	43.3	17	27	18	1
28	5	42	6	13	− 9.5	11	54	46.1	17	35	18	6

各地の日出入補正値（東京の値に加える）

（左側は日出，右側は日入に対する値）

	分	分		分	分		分	分
鹿児島	+30	+43	鳥　取	+20	+24	仙　台	− 3	− 6
福　岡	+33	+41	大　阪	+14	+20	青　森	+ 1	−10
広　島	+26	+34	名古屋	+ 9	+13	札　幌	+ 3	−16
高　知	+20	+29	新　潟	+ 5	+ 1	根　室	−14	−34

◇2月の日月惑星運行図